

# アコースモニウムを用いた電子音響音楽の上演に関する研究

檜垣, 智也

<https://doi.org/10.15017/1543991>

---

出版情報：九州大学, 2015, 博士（芸術工学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：全文ファイル公表済

|        |                             |      |    |      |  |
|--------|-----------------------------|------|----|------|--|
| 氏名     | 檜垣 智也                       |      |    |      |  |
| 論文名    | アコースモニウムを用いた電子音響音楽の上演に関する研究 |      |    |      |  |
| 論文調査委員 | 主査                          | 九州大学 | 教授 | 中村滋延 |  |
|        | 副査                          | 九州大学 | 教授 | 矢向正人 |  |
|        | 副査                          | 九州大学 | 教授 | 尾本章  |  |

## 論文審査の結果の要旨

電子音響音楽の上演に用いられる装置であるアコースモニウム (Acousmonium) は1974年にGRM (フランス国立視聴覚研究所) のフランソワ・ベイル (François Bayle) によって発案された。多数のスピーカを用いたそれはフランスを中心としたヨーロッパ、日本やアメリカにおいて電子音響音楽上演のためのスタンダードな装置になりつつある。しかし上演実践が理論よりも先行して、アコースモニウム及びその上演形態についての研究そのものは不十分である。本論文の目的は、多くのフランス語文献や執筆者自身の豊富な実践体験、著名演奏者たちの演奏分析などをもとに、その再定義を行うことである。

まず第2章においては発案者ベイルによるアコースモニウムの理念を、文献や装置、上演記録から読み解いている。ベイルは、アコースモニウムを「聴感を演出する楽器」と規定し、操作者を演奏者と見なした。その上で聴感の演出のためには「内部空間 (作曲時の音場) と外部空間 (上演時の音場)」の調整を図り、音の放射をスピーカという視認可能な「点」ではなく広がりある「面」で行うことを強調した。そのために「音のプロジェクター」「音響スクリーン」という概念を導入した。ただしベイルはアコースモニウムをオーケストラのアナロジーとしてとらえていたため、聴衆は従来のコンサートと同じような聴取位置に、操作者は指揮者の位置にそれぞれとどまることになった。

第3章ではベイルの後の世代のアコースモニウムを、その機材構成、レイアウト図面、フェーダーとスピーカの構成表などの一次資料をもとに分析している。それらのアコースモニウムがベイルのものともっとも大きく違うのは、多数のスピーカが客席を取り巻くように配置され、操作者がその中央に位置することである。その中で、ベイル退職後のGRMのアコースモニウムは「大きな会場と多彩な電子音響音楽スタイルへの対応」に、フランスの国際電子音響音楽祭フェチュラのアコースモニウムは「ヴィルトオーズ化とスタンダード化」に、ハーヴァード大学のHydraは「マルチチャンネル作品へ柔軟な対応」に、執筆者所有のミュージサーカスは「機動性」に、それぞれ特徴があることを明らかにし、アコースモニウムの多様性の実態を明らかにした。

第4章ではアコースモニウムの上演実践について分析している。まず上演の場における発信と受容の関係図をもとに、アコースモニウムにおける「演奏用スコア」の存在意義を明らかにした。その上でグラフィック、テキスト、波形による3つの書き方による演奏用スコア実例を提示し、それらがアコースモニウム演奏においていかに有効であるかを具体的に例示した。演奏用スコアは演奏者によって解釈作業の一環として作成されるものである。その解釈の基準となる考えとしてプラジエによる「聴きとりの構図」と、ヴァンド=ゴルヌによる「空間の型」という2つを紹介した。以

上を踏まえた上で、執筆者の作品《豊饒の海》(2011)の演奏用スコアを示し、その演奏方法を分析をともないつつ解説した。

第5章では第2章から第4章の内容を、アコースモニウムの理念、様々な装置の特徴、装置の枠を超えた楽器という観点から考察している。第6章結論においてはその考察を受けてアコースモニウム及びその上演形態について以下のようにまとめている。

アコースモニウムの理念は、①特性の異なる複数の音響スクリーンを利用して上演空間内の聴感をリアルタイムに演出し、②その際に操作する姿を露わにすることでコンサートの祝祭性を取り戻す、というものである。

アコースモニウムは音源再生機やミキサー、スピーカなどで構成される音響機器の総体であり、その特徴は、③上演の条件に合わせて個別の装置の性格が決まっていて、④空間表現の拡張や演奏技術への対応、機動性が確保されている、というものである。

アコースモニウムが装置の枠を越えた楽器として認識されるのは、⑤その演奏者は自ら作成する「演奏スコア」によって作品を解釈した上で演奏方法を決定しており、⑥様々な解釈と演奏方法へ開かれている、からである。

最後に「アコースモニウムは、電子音響音楽コンサートにおいて、上演空間全体を使用して聴感を演出し、それをリアルタイムな演奏行為により作品の上演に深く関与する楽器である。その手法は多彩で柔軟性に富み、様々な方法に開かれている」と的確に再定義している。

以上のおり本研究は電子音響音楽の演奏という20世紀から21世紀にかけての音楽芸術の実践を読み解くものであり、それにもとづく今後の実践の可能性を示唆したきわめて独創的な研究である。その研究内容は国際的にアピールするにも十分に値する。同時に音響工学的知見を用いた音楽芸術実践についての論考であることが「芸術工学」的である点も高く評価することができる。

よって本論文が博士（芸術工学）の学位に値するものであることを、本論文委員会は認めた。